

⇒ をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 図書館に行こう、出会いの書を求めて！

渡辺 和人
(薬学部教授)

⇒ 第11回北陸大学読書感想文コンクール入賞者を表彰

⇒ 最優秀賞
ちよつとずつの希望と笑顔を持って

縄野 愛都沙
(未来創造学部 国際教養学科 3年次生)

⇒ 優秀賞
悲しみを乗り越える強さ

佐々木 千嘉
(薬学部 薬学科 3年次生)

⇒ 優秀賞
「その日」のまえに

森永 光
(薬学部 薬学科 3年次生)

⇒ 優秀賞
それぞれの「感覚」

柴田 麻里
(薬学部 薬学科 1年次生)

⇒ 優秀賞
パレードが終わった後

楊 希
(未来創造学部 国際マネジメント学科 4年次生)

⇒ 読書感想文コンクール講評

八木 健太郎
(審査委員長・国際交流センター准教授)

⇒ 審査委員から一言

⇒ 学生選書ツアーを開催しました！

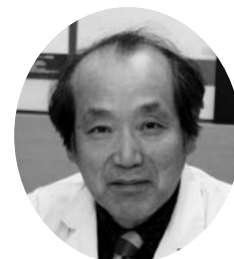


北陸大学ライブラリーセンター報



図書館に行こう、出会いの書を求めて！

薬学部教授 渡辺 和人



私が学生時代を過ごした1960年代後半～1970年代前半は、全共闘安田講堂占拠、アポロ11号月面着陸、大阪万博、沖縄返還、札幌オリンピック、日本列島改造論、日中国交正常化、連合赤軍あさま山荘事件などがキーワードの時代である。日本が高度成長期の真っただ中にあり、社会は今よりも活気に満ちていたように思う。その反面、日本は公害のデパートと揶揄された時代でもあり、全国至る所で大気・土壌汚染や港湾・海洋汚染が問題となっていた。

当時、公害問題に興味を抱いた私は、大学図書館に行き関連の雑誌や書籍を読みあさった。そのお陰で、公害防止管理者国家試験なるものを知り、薬学部の学生でも受験できることから、第3回目の水質第一種試験を受験した。これは薬剤師国家試験に先立ち行われ、私にとっては、初めてのマークシートの体験となった。大学での講義や教科書の内容については、今ではほとんど印象はなくなってしまったが、当時読んだ公害関係の書籍の内容は、何故かよく覚えている。中には過剰に危機を煽るだけのものもあったが、多くは的を射ていたように思う。

それらの中で、最初に出会った書が、環境破壊に対する警告の原典、レーチェル・カーソン著（新潮社版、青樹築一訳）の『生と死の妙薬』、原著名『Silent Spring』である。原著の一部が英語の教科書に引用されており、何度も読み返した記憶がある。今読み直すと、全ての警鐘が正しかった訳ではない。また、現在とは社会背景が異なるので、今の学生諸君が興味を持つかは疑問であるが、当時の私には極めて新鮮で衝撃的な内容であった。

この書との出会いがきっかけで、図書館に通うようになり、大学院に進学し公害に関連した研究をしようとの気持ちが芽生えた。私が大学院で御世話になった研究室（衛生化学・裁判化学教室）は、主力のテーマとしてPCBの毒性研究を行っていた。PCBは、当時、九州北部を中心とした西日本一帯で発生したカネミ油症の原因物質である。PCBは環境汚染も明らかとなり、その毒性発現機構の解明や中毒治療法の開発が急務とされていた。出来ればPCBの研究をやりたい！と大学院生となったが、私に与えられたテーマは、大麻成分に関するものであった。当初は、自分のテーマに対して少し残念に思っていたが、大麻研究は現在も継続している。今にして思えば、学術的のみならず社会的意義のある素晴らしいテーマをいただいたことに対して、恩師に深く感謝している。

その後、縁あって大学院博士課程を2年で中退し、北陸大学に採用された。私が現在、大学で教育・研究に携わることができている要因の1つに、この一冊の書との出会いがあったことは間違いない。本学図書館にも、講義の予習や復習、国家試験対策、語学学習などの参考書以外にも、学生諸君の将来を決める書が待っている。

図書館に行こう、出会いの書を求めて！

第11回 北陸大学読書感想文コンクール

入賞者を表彰

読書感想文コンクールは、今年度で11回目となりました。今回は「読書」と「感想文の作成」という二つの言語的実践を担任教員との交流の中で体得する事を目的として実施され、244編の応募があり、次のとおり入賞作品を選出・表彰しました。

入賞作品

📖	最優秀賞	縄野愛都沙	ちよつとずつの希望と笑顔を持って	(未)	3年
📖	優秀賞	佐々木千嘉	悲しみを乗り越える強さ	(薬)	3年
		森永 光	「その日」のまえに	(薬)	3年
		柴田 麻里	それぞれの「感覚」	(薬)	1年
		楊 希	パレードが終わった後	(未)	4年
📖	佳作	二見和由美	カラフルに生きる	(薬)	1年
		伊藤 梢	本能とか欲望というもの	(未)	3年
		伊東 優希	百歳	(未)	2年
		堀地友里香	良心か命令か	(未)	1年
		朱 奇瑩	沖縄に耳を澄まして	(未)	科目等履修生
📖	努力賞	山際 翔太	それでもなお	(薬)	2年
		柴田 千尋	行動の結果	(薬)	2年
		金城 香代	精神科 ER	(薬)	1年
		久高 理絵	『人の心はどこまでわかるか』を読んで	(薬)	1年
		高良いつみ	植物の世界から	(薬)	1年
		武井ひかり	「難」と闘うひとびと	(薬)	1年
		田谷 円香	「友だち」	(薬)	1年
		中山明希子	『死の壁』を読んで	(薬)	1年
		中山美由紀	考える患者になろう	(薬)	1年
		西園 美沙	『神様のカルテ』を読んで	(薬)	1年
		福井 梢	「なげださない」	(薬)	1年
		深山 綾	大切な人を失くす悲しみ	(薬)	1年
		渡邊 俊樹	ステイブ・ジョブズ失敗を勝利に変える底力	(薬)	1年
		青木 理穂	機械による人間の変化	(未)	3年
		于 麒	命か誇りか	(未)	3年
		白本 奈央	『まじめの崩壊』を読んで	(未)	2年
	野村 有香	『きらきらひかる』を読んで	(未)	2年	
	喜成亜衣子	幸運を手に入れるためには	(未)	1年	
	許 可	死体が残したのは	(未)	1年	
	太田 直貴	『中国の頭脳 清華大学と北京大学』を読んで	(未)	1年	
📖	審査員特別賞	石川 敬士	『神様のカルテ』を読んで	(薬)	3年
		小川 祥子	『戦場の天使』を読んで	(薬)	1年
		竹川 祐以	『人生は廻る輪のように』を読んで	(薬)	1年
		佐藤 真央	心と向き合う	(未)	3年

郭 蕓	不満足=成功?	(未) 3年
白 星辰	夜明けのない白夜	(未) 3年
李 婷	逆境の中のチャンスを!	(未) 3年
南 明世	共感力~人はなぜ人を殺してはいけないのか~	(未) 3年

📖 審査員特別賞 (ベストタイトル賞)

伊藤 暁将	「もっと笑おうよ」『3週間続けば一生が変わる』	(薬) 1年
縄野愛都沙	「ちょっとずつの希望と笑顔を持って」『シューカツ!』	(未) 3年

📖 審査員特別賞 (継続は力なり賞: 3年連続提出者)

(薬) 青木 真詩	・ 荒川 公輔	・ 石川 敬士	・ 石黒 方敏	・ 佐々木千嘉
藤原 明	・ 森永 光			
(未) 衣 怡	・ 沖田 良真	・ 小西 陽二	・ 崔 愷	・ 坂口 拓也
佐藤 真央	・ 炭田 麻衣	・ 中西ひかる	・ 石川友佳子	・ 于 曉涵
汪 月	・ 王 旻紫	・ 喜多 史織	・ 吉 楊	・ 蔡 佳俐
秦 莉	・ 孫 佳林	・ 李 航		

* (薬) は薬学部、(未) は未来創造学部です。

* 今回の読書感想文コンクール応募者の皆さんが読んだ本は、ライブラリーセンター本館1階の読書コーナーに別置してあります。

最優秀賞

ちょっとずつの希望と笑顔を持って

未来創造学部 国際教養学科 3年次生 縄野 愛都沙

書名 シューカツ!

著者 石田 衣良

出版社 文藝春秋社



泣いている私がいた。今年の二月のことで、私は短大生だった。

短大に入学した頃に、四年制大学に編入することは既に決めていたので、去年の秋頃から各大学の編入学試験を受け続けていた。もちろんこの大学の試験も受け終わり、合格という結果まで頂いていたが、実は私には他にいきたい大学があった。雑誌編集の実習があり、文章を書く基本的なことを現役作家の方々から学べるという、雑誌の編集記者志望で小説を書くのが好きな私にとってはとても魅力的な大学だった。

ここまで書けば想像はつくかもしれないが、私が泣いていたのは、その大学の試験に失敗してしまったからである。そして、春から通うことになった大学の「主な就職先」にマスコミ関係の企業の名前はひとつも見つからず、自分の夢を諦めなければならないかもしれないと思ったからだった。

その時は「人生終わった」と思った。まだまだ続く人生のほんの一部の、あんな些細な失敗のせいで私の一生はつまらないものになると本気で信じていた。

大学に入ってみると、新しい友達もでき、第一志望に受からなかったからといって自分の将来を捨てなくてもいいこともわかり、ネガティブな自分は消えてしまった。それでも不安は残っている。

就職難のこの時代、希望する企業に入れられないかもしれない。夢なんて持っている意味がなくなるのかもしれない。他の人がみんな自分より優秀で余裕がありそうに見えたり、「私なんかじゃ就職できるのかな」

と悩んでみたりして、「仕事を得る」ことはなんて難しいのだろうと憂鬱になることも多い。

夏休みに入り、授業がなくなると、就活について考える時間が増えた。大学へ行く用事もないので、休暇の間は家族以外の人と会う回数が減り、ひとりで悩むこともしばしばあった。

そんな時に会ったのが、石田衣良さんが書いた『シューカツ!』という小説だ。

「就活」という言葉に敏感になっていた私は本屋でその文庫を手にとって、カバーに書いてあるあらすじを読んだ。私と同じ大学三年生が、私の希望するマスコミ業界を目指して就職活動をするという内容だった。すぐに買うことを決めた。

ざっと言えば、マスコミ志望の七人の大学生が「シューカツプロジェクトチーム」を作って情報交換や就活合宿をし、就職試験に臨むという物語だ。

自分も体験するであろう話を読み始めると止まらなくなった。自分のPRできる長所って何だろうと考えたり、インターンに参加したり、OB・OG訪問をする。そして就職試験に臨む。筆記試験でつまずいたり、面接で意地悪な質問をされたりするけど、それも笑顔で乗り切らなければならない。就職活動の大変さがリアルに描かれていて、「悩んでばかりいる暇はないな」と逆に気持ちが引き締まった。

特に印象に残ったシーンは、主人公・千晴の就職試験の場面と、「シューカツチーム」のメンバー・比呂氏が就活のプレッシャーに負けて引きこもりになってしまうという場面だ。

千晴は友達と一緒に在京のテレビ局にインターンに行き、ワイドショーの制作を経験する。殺人事件の生の現場を乗り切った彼女にディレクターは高評価をくれるのだが、友達はアナウンス部からスカウトされ、シューカツチームでいちばんに就職が決まる。「自分だけ声がかからなかった」と思い悩む時期もあったものの、「一緒に働こうね」と言い合って試験に臨んだ千晴は最終面接まで順調に進むのだが、そこでつまずいてしまうのだ。

そのつまずきをどう成功に繋げるか、が人生を楽しくするコツだと私は思った。千晴はとても落ち込むが、その出来事をユーモアを交えながら他企業の就職試験で話し、自分を成長させてくれたことだと思えるようになった。そして、物語の最後に彼女は内定を貰う。たったひとつ失敗しただけで「人生終わった」などと思っただけではいけなかったのだ。それをも今後の力に変えて、成功と繋がるように努力を続けるべきだということ学んだ。

比呂氏が引きこもりになってしまう場面は衝撃的だった。就活というものは一人の人間をここまで壊してしまうほどのものなのだろうか。思えば、この本を読むまで私もひとりで悩んでいたのだ。あのよう悩み続けたまま就活本番を迎えていたら、自分も比呂氏のようになっていたかもしれない。就活は個々の戦いのように見えるけれど、比呂氏がシューカツチームの皆に励まされて復活できたように、互いに助け合ってこそ成功できるものだとわかった。

先日、私は東京で行われる二社のインターンにエントリーした。今日、そのうちの一家から返事が来て、どうやら書類選考に通ったらしかった。そういったちょっとずつの喜びを糧に、これからの本番も千晴のように笑顔で乗り切ろうと思う。

最優秀賞を受賞して

縄野 愛都沙

「最優秀賞」というものを貰ったのはこれが初めてです。とても嬉しかったし、とても驚きました。

夏休みに読書感想文用の本を買いに行った時、実は心の中で「これにしよう」と決めていた本があって、それは今回の『シューカツ!』ではなかったのです。たまたまいつもと違う本屋さんに行って、たまたまこの本と出会った。そういう「たまたま」が続かなかつたらこの受賞はなかったかもしれないなあ、と考えると、日常を当たり前のように横切っていく奇跡ってすごいと本気で思っています。

私はいよいよシューカツを迎えています。実際はあたふたして、「千晴のように元気に乗り切るぞ!」と決めたのにその通りにはいっていない気もしてかなり焦っていますが…頑張るしかないですね。

優秀賞

悲しみを乗り越える強さ

薬学部 薬学科 3年次生 佐々木 千嘉



書名 ムーンライト・シャドウ

著者 吉本 ばなな

出版社 新潮社

「一涙があふれた一運命はもう、私とあなたを、こんなにはっきりと川の向こうとこっちに分けてしまっ
て、私にはなすすべがない。涙をこぼしながら、私には見ていることしかできない。」

これは主人公が死に別れた恋人と再会を果たしたときの彼女の心の内である。私は主人公の内側に潜って
この光景を見ていた。自然と涙がこぼれた。ただひたすらに悲しかった。これは二人の最後の逢瀬であり、
永遠の別れであったのだ。

冒頭は主人公が恋人との思い出を語るところから始まった。彼女の語る二人は、まるで世界から祝福さ
れているかのように幸せそうであった。しかしこの語りには続きがあり、そこで彼女の恋人が二か月ほど
前に故人となっていたことが知らされた。主人公は「さつき」という女子大学生であった。彼女は恋人を
亡くしてからというものよく眠れなくなり、それを解消するために夜明け時にジョギングをするよう
になっていた。彼女のジョギングコースの折り返し点は街を二分する大きな川の白い橋がかかっている地点
であり、この場所は彼女が川向こうに住む恋人といつも待ち合わせをしていた場所であった。そしてある
日のジョギング中、彼女はこの場所でうららに声をかけられた。うらはまるでこの世の悲しみも喜びも
すべて飲み込んだ後のような深い深い表情を持つ不思議な女性であった。彼女は後にもうららと会うこと
となり、そこで不思議な誘いを受けた。彼女は言われたとおり、定日の夜明け前に初めてうららと出会っ
た場所へと向かった。うらは橋に立っていて、そこでこう言った。

「いい？今から少し、ここの次元や空間や時間や、そういったものが揺れたり、ずれたりする。あなた
とあたしは並んでいてもお互いが見えなくなるかもしれないし、全く違うものを見るでしょう。……川の
向こうにね。決して声を出したり、橋を渡らないで。いいかい？」

そして、さつきは川を挟んだ向こうにこちらを向いて立つ恋人の姿を見た。青い夜明けのかすみの中、激
しく流れる川を隔てて、彼女は恋人とただ見つめ合った。そして、夜明けに差し込む光とともに姿の薄れ
ていく恋人が笑って手を振ったとき、彼女は息が詰まるほどの切ない痛みを感じながら手を振りかえした。
別れの存在する世界に生きていくことを決意して。

大切な人の死はこの世に生きる人々の多くが体験するものである。大切な人の死を見とどけ、それを胸
に抱えて生きていく。これは多くの人々が今まで成し遂げてきたことであり、日常にありふれている現実
なのである。しかし、この誰しもが体験する現実、深くて重くて痛くて苦しい。私は主人公の経験を
共有することにより、今さらながらにこの現実を思い知った。彼女はこのつらい現実を受け入れたのだ。
このような現実の存在する世界の中で生きていくことを決意したのだ。これはとてもすごいことだ。悲し
みを受け止めることのできる強い心とその先の未来に立ち向かう勇気があるからこそ成しえたことなのだ
ろう。私は、これらはきっと彼女の中に本来より存在していた「強さ」なのだと思う。そして、今回彼女
がこの強さを引き出すことができたのは、きっかけがあったからなのではないかと考える。うらが彼女
に別れのチャンスを与えた。彼女の恋人が彼女に手を振り、彼女に別れを伝えた。これらがきっかけだっ
たのだ。彼女はいつかは悲しみを抜けるときがくると信じ耐えていたが、心は変わらず恋人を求め続け、
強さと弱さのはざまに揺れていた。このような中で、彼女はこれらのきっかけがあったからこそ別れを決
意することができたし、恋人の姿を目の前にした時も橋を渡らずに踏みとどまることができたのではない

だろうか。

私は、彼女だけではなくこの世に生きる全ての人が、本来悲しみを受け止めてそれを抱いて生きていけるだけの強さを持っていると思う。中には死の別れという悲しい現実を受け入れることができない人もいるかもしれないが、それはその強さを引き出すことができなかつたからなのではないだろうか。実際、それを引き出すことは人によってはとても難しいことなのだと思う。自分からそれを引き出すことのできる人もいれば、何かに助けを借りなければ引き出せない人もいるだろう。そして後者はそのような助けを得ることができれば運が良いが、得ることのできない場合もある。彼女には後押ししてくれるきっかけがあった。彼女は運が良かったのだろう。私にもいずれきっと大切な人の死が訪れる。そのとき、私にも彼女のときと同じようにきっかけがあるとは限らない。私は大切な人が死んでしまったとしてもその後を追うことはきっとないだろう。それはただ単に自分に死ぬ勇気がないからだ。私は死ねないから生きる。しかし、生きるのであれば、私は強く生きたい。悲しみに囚われて未来を無下にはしたくない。私にもきっと強さがある。その強さを信じて、私は悲しみを乗り越えて生きていきたい。

優秀賞を受賞して

佐々木 千嘉

死は、多くの人が一度は自分自身あるいはその周囲に当てはめて思いを巡らす、人にとっての共通のテーマであると思います。従って、今回の受賞に至った理由には、私の選んだ題材がこの死に関連するものであったことが大きく関与しているのだと思います。また、私が感想文中で述べた「強さ」に対する思いが、少しなりとも審査員の方に共感を与えることができたからだとも考えます。私はこのことに喜びを感じ、こうして受賞できたことをとてもうれしく思います。

優秀賞

「その日」のまえに

薬学部 薬学科 3年次生 森永 光



書名 その日のまえに

著者 重松 清

出版社 文藝春秋社

その日。この物語で「その日」とは、誰かが亡くなる日を意味します。誰にでもいつかは訪れる「その日」。家族の、親しい人の、あるいは自分自身の「その日」、ただ漠然と遠い未来のように思っていた「その日」を、自分が迎えるとしたら、私達は何を思い、何を考えるのでしょうか。

この本には、病気や事故によってこの世を去ってしまう人とその傍らにいる人の心の葛藤を、そしてその傍らの人の死の後にも生き続ける人々の懊悩が描かれています。近づく家族や同級生や自分自身の死を前に、それまでの人生を振り返り、その人の生きてきた意味や死んでいく意味を自身に問いかけながら、数え切れないほどの思い出や後悔にもがき苦しむ姿に、まるで自分がその人になったかのような気持ちで読む手が進んでいきました。

ところが、全てを読み終えたとき、一抹の不安が私の中に生まれていることに気が付きました。幸いにも家族や身近な人を亡くした経験のない自分が、この物語を本当に理解しているのか、自信が持てなくなったのです。大切なひとを亡くすということが、大切なひとを残して死ぬということがどういうことなのか、死というものを実感したことのない自分が、一度読んだだけでそれらを分かったような“ふり”をしてはいけないような、理解してはいけないような気さえました。本を置いて自分が生きる現実目に向けて

と、自分の周りに流れる日常がこんなにも平和でいいのだろうかと思ってしまいました。

しかし何度も読み、本の中と現実とを行き来し考え、悩むうちに、ふと気が付いたことがありました。「死」を考えるということは、「生」を考えるということではないかと。この物語のタイトルが「その日」でも、「その日のあとで」でもなく、「その日のまえに」であるのは、いつかは誰にも例外なく訪れる「その日」の前に、自分の周りには誰にも代え難い大切なひとが「いる」ということの幸せに気付いて欲しい、という作者の意図が込められているからではないかと思います。「母ちゃんは『いる』—それだけで、いい。うまく言えないけど、母ちゃんの役目は『いる』ことなんだと思う。(中略)とにかく、母ちゃんは『いる』からこそ意味がある。いてくれないと困る。いてほしい。絶対に。これからも。」これは母親が命に関わる病気を患っていることを、自分に隠しているのではないかという不安に駆られた高校生のトシくんが、自分に言い聞かせるように呟いた言葉です。私達はいつの間にか、家族や友人が「いる」ということを当然のこのように思い、無意識にそれが永遠に変わらないことであるかのように思ってしまうのではないのでしょうか。そんな“当たり前”を揺るがすようなことが起こったときに初めて、私達は大切なひとの存在を意識し、それがいかに幸せなことであるのかを自覚するのでしょうか。

3月11日に起きた東日本大震災で私達は、普段は考えることのない、身近な人の「死」について強く意識させられました。明日からも「いる」はずだったひとが突然いなくなるということ、今の私には、それがどんなに悲しくて、悔しくて、重たいことなのか、想像することはできても、本当の悲しさや悔しさ、重さは分からないのだと思います。

ひとが死んでしまうことの意味とは何なのか。本の中の、のこされたひとが「その日のあと」で行き着くその答えとは、「考えることが答えである」というものでした。私にもいつか、「死」に向き合わなければいけないときが訪れ、ひとが死んでしまうことの意味を自身に問うときが来ると思います。そのとき私は自分なりの答えを見出すことができるのでしょうか。

私達にとって、「その日のまえ」とは日々の日常を指していると考えます。「その日」までに与えられている時間は限られている、だからこそ今を、周りにいる家族や友人との時間を大切にしたい、この作品を読んでそう感じる事ができたと同時に、日常の中にある幸せに気付かせてくれた、この作品に出会えたことに感謝したいと思います。

優秀賞を受賞して

森永 光

優秀賞という光栄な賞に選んで頂けたことを嬉しく思うとともに、大変感謝しています。今回のコンクールで三度出品させて頂きましたが、読書感想文を書くということは何度経験しても難しく、時に苦しい時間でもありました。『「その日」のまえに』は人の死がテーマにされた作品であっただけに、今まで以上に悩み、考える時間が長かったように思います。しかし同時に、薬剤師を目指す私にとって、とても意味のある時間でもあったと思っています。私の感想文に共感し、評価して下さったことを大変嬉しく思います。ありがとうございました。

優秀賞

それぞれの「感覚」

薬学部 薬学科 1年次生 柴田 麻里

書名 県庁おもてなし課

著者 有川 浩

出版社 角川書店



皆さんは〇〇感覚と聞いてどのようなものを思い浮かべるでしょうか。時間感覚、方向感覚、金銭感覚など〇〇感覚というものは様々あります。私が今回読んだ『県庁おもてなし課』は民間感覚と行政感覚の違いが表現されていました。

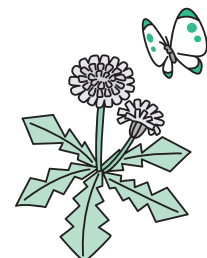
物語は高知県庁の観光部に「おもてなし課」が発足したところから始まります。おもてなし課とは、県外観光客を「おもてなし」する心で県の観光を盛りたてようと発足した課でしたが、配属された人たちは何をして良いか分からず右往左往します。そして、「観光特使」という制度（地元出身の著名人を観光特使に任命し、県の魅力をPRしてもらおうというもの）を他自治体の後追いで始めたのは良いものの、県庁の中と外の金銭感覚、時間感覚のずれによってなかなか上手くいきませんでした。しかし、ある観光特使の厳しい言葉によって、感覚のずれを見つめ直しながら観光を盛りたてていくプロジェクトを進めるという話です。

私がこの話の中で印象に残ったのは、「あんたたちさあ、時間がタダだと思ってるだろ」や「時間って一番高い商品なんだよね」というある観光特使の言葉でした。話の中では、観光特使を引き受けたがその後一か月も官庁側からの音沙汰がなく、観光特使として配ってほしいという、PR用の名刺も届かないための言葉でした。もし、もっと名刺が届くのが早ければ多くの人にPRする機会があったのに、行動が遅いために損をしている。名刺など千枚単位で注文して、数日で受け取れるのが民間の感覚なのに、一か月もかけてしかも音沙汰なしなんて世間ではありえないと、特使の言葉にあり民間と行政との間の時間感覚のずれを感じました。実際、ニュースなどを見ていて、なぜあの案がすぐに通らないのだろう。こうしている間にも、事態は進んでいるのに、と思うことも多くあり、これが民間と行政の時間感覚のずれによるものであるなら、損をしているどころの話ではないなと思いました。

このように、この話の中では民間と行政の感覚の違いでしたが、このような感覚のずれは他の事にもいえるなと思いました。そして、将来の自分にあてはめるつもりでこれが薬剤師と患者ではどのような感覚のずれがあるのか考えました。

ある時、祖父が風邪をひき医者にかかったのですが、その後に飲んだ薬が合わず、おなかの調子が悪くなり再び医者にかかっていた。このとき、祖父は医師から「薬が合わなかったようです。前の薬は捨てて、新しい薬を飲んでください」と言われたそうです。このことについて祖父は、「薬が合わんとはどういうことじゃ」と言い、祖母が「そんなこともあるんけ」と母に聞いていて驚いたことがあります。私にとっては薬には人によって合う合わないがあることや、薬には副作用があることも当たり前のことですが、それを知らない人もいるのだなとその時思いました。そして、これが薬剤師と患者のずれの一つだと私は思います。これから様々なことを勉強して、薬剤師に必要な知識を多く身につけると思います。その中で、薬剤師にとって当たり前のことでも患者さんにとっては当たり前でないことを忘れてはいけないと思います。副作用や人によって薬が合わないことがあるというのも、最近ではほとんどの人に知られていると思っていましたが、そのことを知らない人も多くいることを知っておかなくてはいけないと思いました。

『県庁おもてなし課』を読み、感覚の違いについて考えて、感覚の違いとは人と人のある壁のように感じました。それぞれの感覚の違いを無くしていくことは、壁を取り払い相手との仲を深めることだと思います。他人の感覚を受け入れることは反発やプライドによって素直に受け取れないときもあり難しいことだと思うけれども、多くの人が様々な感覚を受け入れて豊かな人になればいいと思いました。



優秀賞を受賞して

柴田 麻里

今回、このような賞を頂きとても嬉しく思います。入賞するとは思っていなかったのですが、賞の報告を受けた時はとても驚きました。読書をするのは好きですが、自分の考えを文章にすることに対して苦手意識があり、書きあげるのに苦労しました。けれども自分の作品を選んでいただくことができ、文章を書くことに少し自信を持つことができました。

読書は自分の今までに無い考えを知り、知識を取り入れることのできるよいことだと思います。これからも様々な本を読み、また自分の意見を文字にして人に伝えることも積極的に行っていきたいです。

優秀賞

パレードが終わった後

未来創造学部 国際マネジメント学科 4年次生 楊 希

書名 パレード

著者 吉田 修一

出版社 幻冬舎



「まさに『うわべだけの付き合い』と呼ぶのかもしれない。でも私にはこれくらいがちょうどいい」

東京都内のある2DKマンションに男女五人の若者たちが暮らしている。腑抜けで先輩の彼女に恋する大学生良介、恋愛依存気味の無職者琴美、自称イラストレーターの未来、映画会社で勤務する健康オタクの直輝、そしてある日酔っ払った未来さんに連れてこられた、「夜の仕事」に従事するサトル。五人の共同生活はいかにも平和で、かつ楽しそうに見える。寝室からリビングに入ると話し相手がそこにいる。冗談や世間話で盛り上がるし、相談や誘いにいつでも乗ってくれる。すでに満室状態だけど、狭くも息苦しくも感じられない。

しかし、そこに妙に違和感が漂う。それが中に暮らす人は誰でも感じられる。

なぜ満室なのに狭くも息苦しくもないと感じるのだろう。なぜ素性もわからない人を平気で連れてきて、一緒に暮らせるのだろう。なぜ違う世界にいる人たちが常にリビングで話題を共有し、盛り上げられるのだろう。

この部屋は、善意のみ入場可能な、出入り自由の「チャット」やBBSみたいな空間だからだと琴美がいう。「いやなら出ていくしかない。いるなら笑っているしかない。」

そして「ここで暮らしていて、この住人とうまくやっているのは『この部屋用の私』なのだ」と未来が言った。「皆それぞれ『この部屋用の自分』を作り出していないと言い切れない。よって、誰も実際にはこの部屋に存在しない。ここは満室でなく空室なのかもしれない。」

しかし自分の寝室に戻ったときだけ、各自の世界に戻り、真の自分と立ち向かう。そこには寂しくて、苦しく、ときにはゆがんだ自分がある。他人に言えない苦しみこそ、本当の苦しみだろう。それに対し、リビングで軽くルームメイトに吹き飛ばすような悩みは、一体何なのだろう。

未来が自分の秘密が潜んだビデオテープを重宝して、そこに心の慰めを求めるといふ。琴美がだらしない毎日を送っているながら、人気アイドルの彼氏とうらやましき恋をする。しかし先の見えない恋の脱力感自分しか味わえない。良介が無神経で時に軽薄にも見えるが、皆と離れた場所で死んだ友人のために泣き崩れる。さらに皆に尊敬された直輝が、正直で穏やかな顔の下に、通り魔の正体を隠している。他方、外から入ってきたサトルは、さりげなく4人の生活に溶け込みながら、刃物のように、平らな水面に突っ込んで、波紋を広げる。

秘密というものは、諸刃の剣とも言えよう。他人から守りながら、つねに苦痛や恥を帯びている。苦痛と恥の思いに引き締められたときに自分を解放させる方法が二つあるだろう。ひとつは他人の秘密を覗くこと、それによって自分の不幸を忘れる。もうひとつは誰かに全部打ち明けること。自分の恥を白日の下に晒すことを対価にして。その後は秘密が消えてしまう。リビングで琴美や良介が日々隣人のやりとりを妄想することが前者だ。しかしリビングから寝室に戻った瞬間、依然として不安と焦燥感が募ってどうしようもない。

そこでもう一人の自分を装えなくなった皆が、とうとうお人好しで面倒見役の直輝に秘密を打ち明ける。そして最後に直輝の恐ろしい秘密が明るみに出てくる。けれども私から見ればそれを目の前にした皆の反応がもっと恐ろしい。笑って無視するのだ。なるほど皆は、近所に起きている通り魔殺人の犯人が誰かを気にせず、周りの人の真実も気にしないのだ。気にするのは、一応の家と呼ばれるここで、皆が笑っているかどうかしかないのだ。

すでにある共同体に溶け込んだと思ったら、実はそこにきちんと線引きがされている。それこそが社会の現実ではないか。皆がその見えない線を気にしたからこそ、仲良くできるようだ。しかし作者が描いた物語の展開はあまりにも皮肉で情けなく感じられる。見えない線によって人間関係のバランスが保たれている社会はいつか籠になる。心の安らぎを求める人間はいつの間にか窮屈な籠に囚われてしまう。しかし多くの場合、人はバカに成りすましてそのまま居続けたいと思っているようである。そこに確かに自由も幸福もないが、危険や苦痛もないからである。考えることの苦痛だけは、なによりも避けたいと思われるからである。結局私たちはそこから逃げ出すのか、そのまま居続けるのか—答えは質問を投げられた人の心の中にしかない。ただ、世界は自分が思ったよりずっと広いということを忘れてはいけない。秘密やプライドを背負って息苦しくなるのなら、そこから飛び出して、より広い世界を探してもよいのではないか。それは決して逃げるということではなく、生き残るといふことなのである。

優秀賞を受賞して

楊 希

単純な気持ちを書いただけの拙作で優秀賞をいただいたことに恐縮と不安ばかりを感じていました。でも、読んでいただいた方に同感をいただくことは嬉しい限りです。作文は自分にとって本当の自分に向き合う機会であり、「救い」でもあります。それでどれだけ読者の方に伝わるかは分かりませんが、素直な自分に向き合うことを感じていただければ幸いに存じます。

読書感想文コンクール講評

審査委員長・国際交流センター准教授 八木 健太郎



読書感想文審査委員として皆さんの感想文を読みながら、自分自身が最後に読書感想文を書いたのはもう20年以上前のことになるなあ、と私事に思いを巡らせた。

夏目漱石の『こころ』だったか、三島由紀夫の『金閣寺』だったか、そんなことも覚えていないが、とにかく担任の国語の先生のコメントだけをやけにはっきりと覚えている。

「おまえの作文は、何言ってるか、分かんないよ」

高校生の私は、ひどく腹を立てた。その後、その先生と口を利かなかったように思う。そして、分からないのはその先生の理解不足のせいだと考えることで、自分のプライドを守ることにした。

私は、その先生に謝罪しなければならないだろう。今、私には容易に分かる。当時私が書いた作文は間違いなく「何言っているか分かんない」モノで、担任の先生が辟易するのも当然の文章だったに違いない。

恥ずかしい。

私はなぜ、このように「恥ずかしい勘違い」をしてしまったのだろう。母語で書いた文章が伝わらないはずがないという勘違いと、伝わらない場合は相手が悪いという勘違い、その二つの勘違いの責任が私自身にあることは明白である。私個人の短慮で不遜な性情に問題があったことは間違いない。ただ同時に、この種の「恥ずかしい勘違い」は、若い学生にとっては、意外と陥り易く危険な罠なのではないかということ、皆さんの読書感想文を読みながら痛感した。本の粗筋を、その本を読んでない人にも分かるように説明する力。その本を読み進めるうちに自分の中に生じた思考や感情の複雑な変化を、実感を伴って伝える力。そういった表現力を身につけることは、確かに至難の業であろう。難しいから、伝えることを諦めてしまう。そして、自分が伝えることを諦めたことすら忘れ、後は読み手の解釈に委ねてしまう。ひどい場合は、分からないのは読み手のせいだと責任をなすりつける。

問題は、学生の日常にあるのではないだろうか。学生は圧倒的に「聞く」時間が長い。毎日何時間も椅子に座って講義を聞く。先生からの指導を聞く。アルバイトで店長の指示を聞く。「読む」時間も意外に少なくないかもしれない。教科書を読むことこそが勉強だと考える人は多い。配布されるプリントの量もかなりのものだ。一方、「説明する」ことや「書く」こと、つまり自分から「伝える」ことはほとんどない。あっても状況が極端に限られている。せいぜい、バスが遅れたから遅刻したと5秒で教師に説明するときや、友人に50字程度のメールを打つときぐらいだろう。

だが、社会人はそうではない。ただ聞くだけ、読むだけの仕事なんて皆無に等しい。営業の仕事に携わっている人は、その商品やサービスが他社のものと比べてどんな点で優れているかを説明しなければならないし、人事や総務の仕事をする人は、簡潔で明瞭な連絡を社内の様々な人に対して行わなければならない。相手がオンタイムで不明な点を質問してくれるわけではない分、メールや掲示物など文章だけで伝えるのは一層難しい。そもそも、伝えようとししない人間は、相手にもされないだろう。何も言わなくても、じつとこちらを観察し、無条件に考えを理解しようとしてくれる人など、家族や恋人、親友以外にはいない。

大学が社会人になるための勉強（準備）の場であるならば、大学生はもっと「伝える」ことを学ばなければいけない。まずは「伝える」ことが如何に難しいかということ謙虚に理解し、それでも大人として認められるためには「伝える」義務があるのだという矜持を持ち、そして、どのように伝えると最も効果的なのかということ、具体的な一つ一つの実践の中で学んでいくことこそ、大学生がすべき勉強なのではないだろうか。

読書感想文でなくても構わない。ただ、読書感想文だって、そういった学びの機会になるはずである。今回の読書感想文コンクールで、この「伝える」ことの難しさを少しでも感じるものがあつた学生や、少しでも伝え方のノウハウをつかんだ学生がいればいいなあ。そう心から願っている。

審査委員から一言



審査委員
村田 和弘
(未来創造学部教授
・学術資料部長)

読書感想文の定義とは何か。「想」という字の本義は「想像する・イメージすること」ではなく、ある対象について「心において考えること」あるいは「そのイメージについて考えること」であるとされる。すなわち五感的な感覚そのままではなく、それを対象物として思考を廻らすことがそこにはなされていなければならない。作品との距離、そして自分との距離。知識やノウハウを得るための読書もある。記憶して点数を稼がなければならない読書もある。救済や解放を渴望するための読書もある。もちろん物語を楽しむための読書もある。何でもよい。何に心を動かされるかは特定できない。だがどのように心を動かされたかは、トレースできるのではないか。注意したいのは、没我的な読書に思考はあるだろうか、常に自省することだ。今回の受賞作はそれぞれにおいて程度の差こそあれ、見事に作品を再構築しているように思う。具体的な講評は他の委員の方にお任せするとして、私からは、読ませてもらい有難うと、心から述べたい。



審査委員
鍛治 聡
(薬学部教授)

今年も感動が伝わってくる作品を楽しませてもらいました。ここで、今年の作品の傾向は・・・と入っていくのが常道ですが、そこは、「楽しんで読み、思ったことを発信してください。」で終えて、「楽しんで読んでいます」を紹介したいと思います。机に向かいもよいのですが、ときおり車窓からの風景を楽しみながらの読書もまた別の趣があるのではないのでしょうか。帰省に際し、通学のバスの中で、はたまたグローバルプログラムの移動中と色々ですね。私自身、瀋陽発北京行き夜行列車で、車輪の音と中国語に囲まれ三国志を読むという経験をしたことがあります。漢字の母国ですから、周りの乗客は得体の知れない輩が三国志演義を読んでいるとばかりに、三段ベッドに寝転ぶ他の五人から覗き込まれました。言葉ができないのが残念。北京発西安行きだともっと雰囲気が出たのかなぁと思いながら、まあ、中国大陸だ。悠久の歴史と広大さを感じつつ、ただのオタクと自覚もしながらも楽しみました。“今宵は夏侯惇”



審査委員
一ノ木 進
(教育能力開発センター准教授)

今回は2回目の審査員ということで、不安よりも期待をもって読むことができた。薬学部学生の感想文は、医療関係の本に関するものがかなりあったが、それ以外の作品に対しても薬剤師としての視点で読んでいる様子が、さすが薬学部生という印象をもった。

今年度の受賞者は、薬学部と未来創造学部でほぼ同数になったが、その一つの理由は、未来創造学部留学生の躍進だと思われる。研究論文は英語で書くことが多いが、論文の英語は決まり文句が多く、小説のように回りの情景や心の変化などの微妙な表現は必要ない。それを思うと、留学生が母国語でない日本語で感想文を書くということは賞賛に値すると思う。

心のこもった文章が書ける、これは種々の資格に匹敵する立派な知的財産だと思う。また、若者の活字離れは相変わらずの感がある中で、今回の「継続は力なり賞」の受賞者、すなわち3年以上の連続応募者は25名を数えた。この受賞者が今後も増え続けることを期待したい。

★学生選書ツアーを開催しました！★

今年度3回目となる学生選書会としての「学生選書ツアー」が、平成23年11月8日(火)の午後、うつのみや書店本店にて行われました。

8名の学生(薬学部生3名、未来創造学部生5名)が参加し、1時間という限られた時間の中でできるだけ店内を回り、本を手に取りながら多くの仲間に読んで欲しいと感じた26冊を選びました。

学生達からは「タイトルで興味を惹かれたり、手に取ってもらえるような本を選べたり、楽しかったです」や「いろいろ見て回って選べたのは楽しかったです。学生一人ひとり選ぶ本も違うと思うので、このような会も良いと思いました。」などの感想が示され、大変好評を得ました。



本を選んでくれた学生たち

CONTENTS

	頁
○ 図書館に行こう、出会いの書を求めて！ ……	1
○ 第11回北陸大学読書感想文コンクール入賞者を表彰	
・入賞作品 ……	2
・最優秀賞、優秀賞感想文 ……	3
・読書感想文コンクール講評 ……	10
・審査委員から一言 ……	11
○ 学生選書ツアーを開催しました！ ……	12



北陸大学
HOKURIKU UNIVERSITY

北陸大学ライブラリーセンター報

NO.32

平成24年3月15日発行

編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター

〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1

TEL. 076-229-3021

FAX 076-229-4850

ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp

北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/

印刷：カンダ印刷株式会社